

現代日本語における〈とき〉をあらわす従属句・従属節の構造

村木新次郎

1. 先行研究

・佐久間鼎(1940)(1955)

「吸着語」：先行する句または文を一つにまとめて、それに関係文のような地位を与え、いわば主文に接続させる、……特定の先行語をもたない一種の関係語。

「名詞的吸着語 時に関するもの」：「一般にそのまま、または「に」を伴って、副詞句を作り、時には接続助詞のような役割をする場合もある。」

とき うち あいだ ころ 時分 節 (まえ あと のち 以前 以来 以後)

・三上章(1953)(2002)

「準詞」：それ自身としては独立して使わない小形の語詞で、先行の語句をただちに受けて、その全体をあたかも一つの品詞のようにするもの。

・奥津敬一郎 (1986)

「形式副詞」：副詞ではあるが非自立的で、補足成分をとって副詞句をなすもの。

たびに ごとに つど ため せいで うえ あげく かたわら ものの くせに
と ば たら なら のに けれど が

・南不二男(1974)(1993)

従属句・従属節の4段階(「描叙」「判断」「提出」「表出」)

・村木新次郎(2002)

擬似連体節をうける従属接続詞に言及し、「かたわら」「あまり」「ついでに」「とおり(に)」「くせに」「わりに」のそれぞれの句・節の述語に注目し、〈肯定否定(=認め方)〉〈テンス〉のカテゴリーの存否を問題にした。

表1

	〈テンス〉	〈肯定否定〉
かたわら	—	—
あまり・ついでに・とおり(に)	+	—
くせに・わりに	+	+

スルかたわら {*シタ/*シナイ/*シナカッタ} かたわら
{スル/シタ} ついでに {*シナイ/*シナカッタ} ついでに
{スル/シタ/シナイ/シナカッタ} くせに

2. 従属接続詞の位置づけ

名詞性：(+) 連体修飾をうける。(—) 格機能をもたない。

副詞性：(+) 広義の連用的にかかる成分を構成する(副詞節をつくる)。(—) 連体修飾をうける。

接続詞性：(+) 先行する句・節を、後続の節につなげる。(—) 連体修飾をうける。

→ 擬似連体節をうける従属接続詞

(擬似連用節をうける従属接続詞もある。) → したがって つれて ともに

(参考) 文相当の形式を、後続の節につなげていく形式としては、(1)語尾、(2)(狭義の)接尾辞、(3)助辞、(4)従属接続詞がある(村木新次郎(1991))。(1)~(3)は、広義の接尾辞に属し、単語内部の問題である。(4)は周辺の単語のひとつで、中心的な動詞などの語形について、もっぱら文法的なはたらきをする形式である。述語の形式を、動詞の「食べる」の例で示せば、以下ようになる。

(1)「たべ-れば」「たべ-て」、(2)「たべ-ながら」「たべ-つつ」、(3)「たべる-と」「たべた-ので」、(4)「たべた ついでに」「たべるに つれて」

3. <とき>をあらわす従属接続詞(一部)の構造 (村木新次郎(2005)一部修正)

3. 1 考察の対象語

かたわら たび(に) ついでに 途端(に) 拍子に/で はずみに/で やさき(に)
最中(に) さなか(に) おり(に) 際(に) あかつきに

3. 2 研究方法

現代日本語の書きことば(小説類・新聞)を対象にした記述的研究

従属句・節の内部構造(述語部分と非述語部分の相関)の吟味

3. 3 用例

(1) 作業場にたてこもって、注文の鳥籠や茶器をつくるかたわら、手ヒマをかけてつくったこの竹人形は、見事な出来栄えといえた。(雁の寺)

(2) 青雲堂主人が力をこめて朗々とよみあげるたびに、壇の後方の椅子に腰かけさせられている歐洲の妻千代子は、羞恥に堪えかねる思いがした。(楡家の人)

(3) 公園の中の売店で煙草とマッチを買うついでに、公衆電話から私は念のためにもう一度私の部屋に電話をかけてみた。(世界の終)

(4) 僕は筆記する手を休めて庭を見たが、赤いカボチャが目映った途端に涙が湧いて来た。(黒い雨)

(5) 結願の当日岩殿の前に、二人が法施を手向けていると、山風が木々を煽った拍子に、椿の葉が二枚こぼれて来た。(羅生門)

(6) 彼らは息をつこうとして口をあけたはずみにおぼれてしまったのだ。(パニック)

(7) 夫婦があきらめかけた矢先、不妊治療が成功して、ジヌオンが妊娠する。(毎日 02.06.07)

(8) ふたりの話は、平さんとかいう男のことなんだが、ぼくちをやっている最中に手ははいて、その男は引っぱられて行ったのだそうだ。(路傍の石)

(9) 組合員らが商店街を盛り上げようと活動していたさなか、通りにあった大型店2店が前後して撤退。客足が次第に遠のいてしまった。(毎日 05.04.22)

(10) 「何だこら、何をぬかす。馬鹿も、休み休み云え。わしが広島から逃げ戻ったおり、あのとき小母はんは、わしの見舞に来たのを忘れたか。わしのことを尊い犠牲者じゃと云うて、嘘泣きかどうかしらんが、小母はんは涙をこぼしたのを忘れたか」(黒い雨)

(11) 退行は、何らかの困難やフラストレーションにぶつかり、乗り越えられなかった際、過去のやり方に逆戻りすることだ。(朝日 01.09.28)

(12) 石見銀山遺跡が世界遺産に登録されたあかつきには、噴水ジュースで祝杯だ。(毎日 07.06.20)

4. 考察の結果

4. 1 述語の内部構造

それぞれの従属接続詞がうけることのできる述語形式は表2のとおりである。「さなか(に)」は、形容詞述語や名詞述語をうけることもある(+は存在を、-は不在をあらわす。+は、特に多く存在する、(+)は、部分的に存在する、(-)は、まれに存在する)。

表 2

	スル	シタ	シテイル	シテイタ	シナイ	シナカッタ	サレ	サセ	マス	シヨウトスル
かたわら	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-
たび (に)	+	-	-	-	-	-	+	+	-	-
ついでに	+	+	-	-	-	-	-	+	-	-
途端 (に)	(-)	+	-	-	-	-	+	+	-	+
拍子に	(-)	+	-	-	-	-	+	+	-	+
はずみに	(-)	+	-	-	-	-	+	+	-	+
やさき (に)	+	+	+	+	-	-	+	+	-	+
最中 (に)	+	+	+	+	-	-	+	+	-	-
さなか (に)	(-)	-	+	+	(-)	-	+	-	-	-
おり (に)	+	+	+	+	-	-	+	+	+	+
際 (に)	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
あかつきに	-	+	-	-	-	-	+	+	+	-

4. 2 述語の形態論的カテゴリー

表 3

	ヴォイス	アスペクト	(テンス)	肯定否定	丁寧さ	(ムード)
かたわら	-	-	-	-	-	-
たび (に)	+	-	-	-	-	-
ついでに	(+)	-	+	-	-	-
途端 (に)	+	-	-	-	-	+
拍子に	+	-	(+)	-	-	(+)
はずみに	+	-	(+)	-	-	(+)
やさき (に)	+	+	+	-	-	+
最中 (に)	+	+	+	-	-	-
さなか (に)	(+)	+	-	-	-	-
おり (に)	+	+	+	-	+	+
際 (に)	+	+	+	+	+	+
あかつきに (は)	+	-	-	-	+	#

(「テンス」と「ムード」は狭義には、発話の終止用法における文法概念である。ここでは、便宜上、従属節の内部にみられる「スル/シタ」の語形上の対立のあるものを「テンス」、「スル」「シヨウトスル」の語形上の対立のあるものを「ムード」としておく。「あかつきに (は)」は仮定条件のムード的意味をもつ。)

4. 3 従属句・節の統語的特性

表 4

	統語的特性			
	主題	主語	～の	～は
かたわら	-	-	-	-
たび (に)	-	+	-	-
ついでに	-	(+)	-	-
途端 (に)	-	+	-	-
拍子に	-	+	-	-

はずみに	－	＋	－	－
やさき (に)	－	＋	＋	－
最中 (に)	－	＋	＋	＋
さなか (に)	－	＋	＋	＋
おり (に)	－	＋	＋	＋
際 (に)	－	＋	＋	＋
あかつきに (は)	－	＋	－	＋

4. 4 従属接続詞の文法的意味

表5

	文法的意味	アスペクト性	タクシス
かたわら	ある行為をしている<同時時間帯に>別の行為をすることを予告する。	無関与	(ひろげられた)同時性
たび (に)	ある事態が成立すると、<いつも>別の事態が成立することを予告する。 ある事態が成立するにつれて、別の事態が<次第に>進行していくことを予告する。	反復相	同時性 (反復・多回性) 継起性 (反復強意性)
ついでに	あることを {する/した} ことを<好機>として、別のことを行なうことを予告する。		(ひろげられた)同時性
途端 (に)	ある事態が成立 {する/した} <直後>に、別の事態が起こることを予告する	瞬間相	同時継起性 (直後)
拍子に/で	ある事態が成立 {する/した} <直後>に、(それが<きっかけ>となって)、別の事態が起こることを予告する。	瞬間相	同時継起性 (+原因)
はずみに/で	ある事態が成立 {する/した} <直後>に、それが<きっかけ>となって、別の事態が起こることを予告する。	瞬間相	同時継起性 (+原因)
やさき (に)	ある事態が成立 {する/している/した/していた} <瞬間>あるいは<直前>に、予想する事態とは異なる別の事態が起こることを予告する。	瞬間相	同時継起性 (+予想に反する)
最中 (に)	ある事態が成立 {する/している/した/していた} <時間(帯)>を意味し、別の事態が起こることを予告する。	持続相	同時性
さなか (に)	ある事態が成立 {している/していた} <時間(帯)>に、別の事態が存在することを予告する。	持続相	同時性
おり (に)	ある事態が成立 {する/している/した/していた} <とき>を意味し、別の事態がおこることを予告する。未成立のことには使えない。	特定のアスペクトに偏らない	同時性
際 (に)	ある事態が成立 {する/している/した	特定のアスペ	同時性

	／していた／しない／しなかった} <とき>を意味し、別の事態がおこることを予告する。未成立のことにも使える。	クトに偏らない	
あかつきに (は)	<未来に>ある事態が成立すれば、別の事態が成立するであろうことを予告する。	無関与	

「かたわら」と「あかつきに(は)」はアスペクトに無関与。「たび (に) 」は<反復相><強意相>を、「途端 (に) 」 「拍子に／で」 「はずみに／で」 「やさき (に) 」は<瞬間相>を、「最中 (に) 」 「さなか (に) 」は、<持続相>を特徴づけている。「おり (に) 」と「際 (に) 」は特定のアスペクトに偏らない。

・<とき>から<原因・理由><条件>へ

「拍子に／で」「はずみに／で」は、<とき>にくわえて、原因・理由にかかわることもある。また、「おり (に) 」 「際 (に) 」は条件にかかわることもある。「あかつきに (は) 」はもっぱら条件にかかわる。

「やさき (に) 」は逆接条件に関わる用法をもつこともある。ある事態が成立する<直前>に、<期待する事態とは異なる事態が起こることをあらわしている>といえないか。

(13) 結婚50年目の3月、「金婚式を」と会場を予約し、楽しみにしていた矢先、入院して4月には帰らぬ人となりました。 (毎日 02.03.12)

5. 多品詞性

表6

	名詞	副詞・接続詞	後置詞	従属接続詞	助動詞
かたわら	+	-	+	+	-
たび (に)	-	-	+	+	-
ついで (に)	+	+	+	+	-
途端 (に)	-	+	-	+	-
拍子 (に)	+	-	+	+	-
はずみ (に)	+	+	+	+	-
やさき (に)	+	-	+	+	+
最中 (に)	+	-	+	+	+
さなか (に)	+	-	+	+	+
おり (に)	+	-	+	+	-
際 (に)	-	-	+	+	-
あかつきに	+	-	+	+	-

助動詞：述語に後接して、術後の文法的意味に關与する単語

(14) 森山真弓法相は会見で「(調活費疑惑は) 事実無根との結論が出ている」と述べたが、逮捕は三井被告がマスコミに接触しようとした矢先だった。(毎日 02.05.30)

(15) 迎えに来た妻が居酒屋の駐車場の間違え、有料駐車場に移動させようとした最中だった。(毎日 03.10.29)

(16) イスラム教徒にとって最大の宗教行事であるハッジ（大巡礼）を直前に控え、イスラムの守護者を任じる同国では武装勢力への警戒を強めているさなかだった。（毎日 04.01.30）

【用例】

『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』／『朝日新聞』（朝日新聞データベース「聞蔵」）／『毎日新聞』（毎日新聞総合データベースサービス）

【文献】

- 奥津敬一郎ほか(1986)『いわゆる日本語助詞の研究』（凡人社）
佐久間鼎(1940)『現代日本語の研究』（厚生閣）
佐久間鼎(1955)『日本語のかなめ』（刀江書院）
鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』（むぎ書房）
日野資成(2001)『形式語の研究－文法化の理論と応用－』（九州大学出版会）
三上章(1953)『現代語法序説——シンタクスの試み——』（刀江書院、くろしお出版から復刊）
三上章(2002)『構文の研究』（くろしお出版）（1959年、東洋大学に提出した学位論文）
南不二男(1974)『現代日本語の構造』（大修館書店）
南不二男(1993)『現代日本語文法の輪郭』（大修館書店）
村木新次郎(1983)「「地図をたよりに人をたずねる」という言いかた」『副用語の研究』（明治書院）
村木新次郎(1991)『日本語動詞の諸相』（ひつじ書房）
村木新次郎(2002)「日本語の文のタイプ・節のタイプ」『現代日本語講座 第5巻 文法』（明治書院）
村木新次郎(2004)「従属節の構造と体系」『2004 日本言語文化教育と研究国際シンポジウム 予稿集』（中国日本語教学研究会）
村木新次郎(2005a)「擬似連体節をうける従属接続詞－「かたわら」と「一方（で）」の用法を中心に－」『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』5
村木新次郎(2005b)「<とき>をあらわす従属接続詞」『同志社女子大学学術研究年報』56